The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	エマニュエル・ドンガラの小説『狂犬ジョニー』における子ども像とドンガラの模索
Author(s)	村田, はるせ
Citation	スワヒリ＆アフリカ研究. 2017, 28, p. 1-20
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/66372
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『スワヒリ＆アフリカ研究』28 号（2017）1-20
大阪大学大学院言語文化研究科スワヒリ語研究室発行

エマニュエル・ドンガラの小説『狂犬ジョニー』における子ども像とドンガラの模索

村田　はるせ

0.　はじめに

1990 年代は、ルワンダ、シエラレオネ、リベリア、コンゴ共和国などサハラ以南アフリカ各地で、「戦闘や暴動の激しさ、被害の大きさ」(武内 2000:12)が顕著な紛争が勃発した。こうした紛争の特質の一つは「多数の民間人が紛争の犠牲者として巻き込まれ、また加害者としてそこに参加していること」(ibid.:13)であるが、なかでも残虐行為に加担した子ども兵士[1)]の存在が注目を集めた。そうしたなか、紛争を生きた子どもを描いた文学作品がさまざまなアフリカ人作家によって書かれた。フランス語で書かれたそうした作品として著名なのは、コートジボワール人のアマドゥ・クルマ(Ahmadou Kourouma :1927-2003)がリベリアとシエラレオネの内戦での子ども兵士を描き、日本語訳もされている小説『アラーの神にもいわれはない(*Allah n'est pas obligé*)』（2000 年）や、ギニア人のチエルノ・モネネンボ(Tieruno Monénembo :1947-)がルワンダでの虐殺を生き延びた少年を描いた小説『孤児たちの長子(*L'aîné des orphelins*)』（2000 年)、コンゴ共和国人のエマニュエル・ドンガラ(Emmanuel Dongala :1941-)の 2002 年発表の小説『狂犬ジョニー(*Johnny chien méchant*)』である。ドンガラはこの小説を執筆していたとき、クルマも子ども兵士を描いた作品を書いていると偶然知り、驚いたという(Le Gros2016)。

子どもと紛争という主題では、児童文学も書かれた。フランス語で書かれたアフリカ児童文学作品のおもなものには、Cuao-Zotti(1996)、Hien(2006)、Mbenga Mpiala(1999)、N'Dah(2008)、Tadjo(2007, 2009, 2010)などがある。このうちブルキナファソ出身のアンソムウィン・イニャス・イエン(Ansomwin Ignace Hien:1952-)の『平和のハト(*Les*

1) 「子ども兵士」は、18 歳未満で軍隊もしくは武装勢力によって徴募・利用されている子どもである。国際法のもとでは子どもを戦闘やその支援事業に従事させることは禁止されている(シンガー2006:19)。 根拠となる国際法として、ジュネーブ第四条約（1949 年）と 2 つの追加議定書（1977 年)、「子どもの権利条約」（1989 年)、「武力紛争における児童の関与に関する児童の権利に関する条約の選択議定書」（2000 年）がある。

colombes de la paix)』（2006 年）は、コートジボワールでの内戦に伴って起きた外国人排斥を取り上げた児童文学作品で、子どもたちが平和をつくりだす物語である。筆者が 2016 年にインタヴューしたとき、イエンは、児童文学作家として、未来を建設する子どもを育てる作品を書かなければならないと繰り返し語った[2)]。イエンはこのように「子どもの未来のために何ができるか」と模索して作品を書いたのである。それは彼一人の執筆姿勢ではないだろう。他の文学作品からも作家たちの子どもや若者への思いを読み取ることができるからである。

このような作品からは、子どもが紛争の犠牲となるなか、作家たちがそろって筆をとったことがわかる。本稿ではこうした作品のなかでも、ドンガラが自国の内戦を下敷きに子ども兵士を描いた『狂犬ジョニー』を取り上げる。ここでは、『狂犬ジョニー』の、二人の思春期の子どもが語り手を務めるという設定に注目し、ドンガラの執筆時の模索とはどのようなものだったかを考察したい。

本稿の構成は以下の通りである。1 章でドンガラの経歴と作品、コンゴ共和国の内戦について整理する。2 章では『狂犬ジョニー』の物語を紹介し、3 章で小説の考察に入る。そこではまず二人の語り手、すなわち子ども兵士ジョニー(Johnny)と難民の少女ラオ(Lao)の語りから、相対立する二人の像を読み取りたい。二人は家庭環境や就学経験がいちじるしく異なっている。ジョニーが自分自身にしか関心がなく、残酷な行為の結果を深く考えることがないのに対し、ラオは周囲を観察し、考え、周到に行動するのである。こうした後に考察するのは、二人が初めて対峙する最終場面である。ここではラオがジョニーを打ち負かす戦略に焦点を合わせる。なぜなら力の上では勝ち目のないラオが生き延びるためにとった方法とこの場面の意味についてみていくと、小説にはドンガラの、「子どもたちをどのように育てたらよいのか」という模索と読者への呼びかけが込められているように読めるからである。

1.　作家エマニュエル・ドンガラの経歴と作品[3)]

作家エマニュエル・ドンガラは 1941 年に生まれ、父の出身地である現在のコンゴ共和国で育った。母は現在の中央アフリカ出身である。コンゴ共和国がフランスから独立

---

2) イエンへのインタヴューについては村田(2016)を参照。

3) ドンガラの経歴については、とくに Brezault(2010 :129, 2012 :7-13, 111-113)、Kadi(2013:11-15)を参照した。文学創作や内戦に関する記述、インタヴューでの発言については、逐次参照先を示した。

した 1960 年には中等教育を修了し、フォード基金の奨学金を受けてアメリカに留学した。1967 年に修士号を取得した後にはフランスに留学、有機化学の博士号を得た。数年はフランスの大学で教鞭をとったが、留学生仲間が欧米諸国に留まる選択をするなか、1977 年にコンゴ共和国に帰国した。彼はその後 1998 年に亡命するまで、首都のブラザヴィル大学(Université de Brazzaville 後に Université de Marien Ngouabi)の教授として化学を教えた。

ドンガラの執筆は学業や研究活動と並行して行われた。2016 年までに小説 5 作、短編集 1 作、戯曲、詩などを発表し、フランスで出版してきた。作品は約 12 言語に翻訳されている。彼はまた多くの評論も発表してきた [4]。

ドンガラが執筆の主題としたのは、自国の政治やアフリカの人権状況、先進国によるアフリカ諸国の経済搾取や政治的支配である。現状に対して沈黙するアフリカ人知識人たちにも厳しい批判を向けた。このように社会的問題や政治に働きかけようとする意識は、アメリカ留学中に公民権運動に積極的に参加したことで養われたとみられる(Brezault 2012:8,10)。それはベトナム戦争の時代であり、アフリカでは南アフリカ、ジンバブエ、ザイールなどでアフリカ人が人種差別や植民地支配、独裁体制との闘いを展開していた。同世代のアフリカ人作家のだれもがそうであったように、自身も「政治参加の作家」(Brezault 2010:7)であったというドンガラは、「1960 年代には、歴史がわれわれに味方している、われわれは世界を変えようとしていると考えていた。したがって書くことは闘争であり、ペンは武器だった」(ibid.:127)と述べている。

ドンガラが最初の小説『手には銃、ポケットに詩(*Un fusil dans la main, un poème dans la poche*)』を発表したのは在仏中の 1973 年で、彼の国で政権が次々に交代し、科学的社会主義を標榜する一党体制が確立されていくなかでのことであった。小説の主人公は、アフリカのある国での武装闘争に革命の理想を掲げて参加した青年マイェラ(Mayela)である。しかし彼は恐怖から戦場を逃げ出し、自国に戻る。やがてマイェラの国の独裁政権が民衆によって倒されると、留学経験と弁舌の能力をかわれて、彼は大統領にまつりあげられる。しかし理想よりも実質的な生活向上を求める民衆によって、5

---

[4] ドンガラの評論は現在ではインターネット上でも読めるが、とくによく知られる評論（Dongala 1979 など）は、PN-PA(Peuples Noirs Peuples Africains)誌で発表されたものである(Brezault 2012 :9-10 / Cazenave 2011 :30, 40-43)。PN-PA 誌はカメルーン人作家モンゴ・ベティ(Mongo Béti)が妻のオディール・トブネル(Odile Tobner)とともに創設した「フランス語で表現する急進的黒人たちの雑誌」（URL より）である。発行年は 1978～1991 年であった。（http://mongobeti.arts.uwa.edu.au/　（2016 年 5 月 31 日確認））

年後にはやはり彼も独裁者として弾劾され、処刑されるのである。ドンガラは小説で、独立や、自身も追い求めていた革命の理想とは、アフリカにとって何であったのかと問うている。

やがてコンゴ共和国では独立後 3 代目の大統領 M・ングアビ(Marien Ngouabi)が暗殺され、1979 年に政権を掌握した D・サスー・ンゲソ(Denis Sassou-Nguesso)が強権的な独裁体制を敷いていった。ドンガラは、国内では政治と表現の自由が厳しく制限され、「不幸にもごまかしの裁判にもとづいて、無実の人々がひどい目にあわされた、銃殺されたのだ」(ibid.:122)と述べている。1982 年に彼が発表した短編集『ジャズとヤシ酒(*Jazz et vin de palme*)』に収められた「リキビ爺さんの裁判(*Le Procès du Père Likibi*)」は、呪医のリキビが地域の有力者の私怨によって裁判にかけられ、不合理な判決を受けて処刑される物語である。政権への批判を含んだこの短編集は検閲を受け、作品を所有していたドンガラの友人たちが逮捕された(Brezault 2012:9, Cazenave& Célérier 2011:40, Le Gros 2016)。

だが当局は、すでに国際的に著名となっていたドンガラ自身を迫害することはできなかったという(Brezault 2012 :9)。彼は文学創作を続け、1981 年に創設した劇団“ Théâtre de l'Eclair à Brazzaville” では自作やサルトルらの作品を上演した。独裁体制下でも、書いた言葉は少しずつではあれ現状を揺るがす力をもっていたとドンガラは回想している(Brezault 2010:125)。1987 年には小説『世界が生まれた朝に(*Le feu des origines*)』を発表し、1988 年には、フランス語で書く著名なアフリカ人作家に贈られてきた「ブラック・アフリカ文学大賞(Grand prix littéraire de l'Afrique noire)」を受けた。この小説では、植民地化以前から独立後までのアフリカ大陸の歴史が、呪医マンクンク(Mankunku)の数奇な運命として描かれている。ドンガラは植民地支配への批判と独立後の社会への落胆という、多くのアフリカ人作家たちが書いてきた主題を取り上げながらも、植民地支配に協力してしまったアフリカ人の罪悪感や、伝統社会がもつ非寛容な側面も書き、単純な型にはめて捉えることなどできないアフリカ社会のダイナミズムを描いた。

しかしドンガラの人生は、1990 年に自国で始まった民主化が引き起こした政治対立と内戦によって急転した [5]。コンゴ共和国では 1980 年代半ば以降、主要な輸出品であ

---

[5] コンゴ共和国の 1990 年代の内戦については、武内(1994, 2000,2016)、Brezault(2012:10-15)、Verschave (2000:14-44)、Yengo(2006)を参照した。

る石油の国際価格の下落が国内経済に打撃を与えたうえ、サスー・ンゲソの汚職に対する不満も高まった。冷戦終結後、先進国が援助のコンディショナリティーとして民主主義的制度をアフリカ諸国に求めていくと、国民の民主化要求はそれまで以上に高まり、政府は 1991 年に国民会議を開催、一党体制が放棄された。その結果 1992 年に行われた複数政党制の大統領選挙では P・リスーバ(Pascal Lissouba)が当選、サスー・ンゲソは得票 3 位で敗退した。とはいえドンガラは、当時次々に誕生した政党について、「内部での真の民主的対話がなく、絶対的な党首を据えた一党制形態にならった」(Brezault 2012:11)ものでしかなかったと述べている。同年の国民議会選挙で過半数の議席を得られなかったリスーバの社会民主主義パンアフリカ連合(UPADS)は、サスー・ンゲソのコンゴ労働党(PCT)との連合で政権運営にあたろうとした。しかし大臣ポストの配分を巡って両党は対立、PCT は連合から離れ、大統領選でリスーバと争った B・コレラ(Bernard Kolelas)の民主統合発展コンゴ運動(MCDDI)と連合した。するとリスーバは 11 月に議会を解散、翌 1993 年の国民議会選挙では UPADS が過半数を制した。しかし野党側は不正選挙を主張、リスーバ政権と野党側の対立は軍と民兵、傭兵などによる武力衝突に発展、内戦となった。各派は党首の帰属民族を支持基盤とし、民兵を徴募したので、政治対立は民族間対立の様相を呈した。1994 年 1 月に停戦合意がなされたものの、次の大統領選挙を 1 か月後に控えた 1997 年 6 月には、首都でリスーバ大統領派とサスー・ンゲソ派が激しく衝突した。このときにはアンゴラ、チャド、モロッコ軍などがサスー・ンゲソ派を支援(Yengo2006 :286)、サスー・ンゲソは同年に再び政権に就いた。だが各民兵組織の激しい武力衝突は続き、2002 年にサスー・ンゲソが新憲法のものとで大統領選挙に勝利し、国民議会でも彼の支持政党が絶対多数を占めると、ようやく武装解除に応じた。しかしこの大統領選挙は、圧力を受けたサスー・ンゲソの政敵が立候補を撤回した結果行われたものであった。彼は多くの犠牲を出しながら、内戦によって政権を奪還したのである。1993～2002 年の内戦の死者数は 3 万人、強姦された女性は 10 万人と推定されている(ibid.:387)。

コンゴ共和国の内戦では、各党が徴募した民兵が大きな役割を果たした。民兵の多くは失業中の若者で、彼らは各党所属のジャーナリストや大学教員、宣伝担当が操作し、流布させた、民族対立を煽る情報などを鵜呑みにして応召したという(ibid.:214)。そうした民兵には 18 歳未満の子どもも含まれていた(ibid.:315)。ところが 1997 年の衝突では、各派の民兵が戦闘よりも略奪とそれに伴う暴力に明け暮れ、甚大な被害をもたらす

という事態が起きた(Yengo 2006:322、武内 2001:36-37)。この際民兵たちはしばしば「われわれの財産を取り戻す」(Yengo 2006:323)と主張しており、暴力の拡大は、公金横領で蓄財した者たちへの制裁(ibid.:323)、そして彼らを利用して「政争に明け暮れる年長の世代への復讐」(武内 2001:37)と捉えられるという。コンゴで蓄積した社会的矛盾への若者たちの不満の噴出をここにみることができるのである。

1997 年に戦場となった首都で生命を脅かされたドンガラは、アメリカ人の作家ら友人の支援を受けて 1998 年に家族とアメリカに亡命した。まもなく出版された『星々から生まれた少年たち(*Les petits garçons naissent aussi des étoiles*)』(1998 年)には、コンゴ共和国に似た国の独裁政権の横暴と独立後初の自由な選挙への失望が、少年の視点でアイロニカルに描かれた。

やがて 2002 年にドンガラは小説『狂犬ジョニー』を発表する。彼の評論「ハリウッド、海賊ビデオ、子ども兵士たち("Hollywood, Pirated Videos, and Child Soldiers")」(Dongala 2011b)を読むと、この作品は彼の信念を突き崩すような内戦時の体験から生まれたことがわかる。1997 年 10 月、戦場となった首都から郊外へと彼が隣人たちと避難していたときのこと、子ども兵士たちが市街のいたるところに作ったバリケードの一つに行き当たったという。内戦中、こうしたバリケードは市街に多数つくられ、民間人は民兵からの通行料の徴収、暴行、殺害の被害を受けていた。このときも同行の男性がドンガラの目前で兵士たちに突然打擲されたという。しかしドンガラは結局何もできずに立ち尽くしてしまったのである。つねに「社会活動家であり」、「弱く、抑圧された人々の側に立ってきた」(ibid.)つもりの彼だったが、死の恐怖をまえに正義を貫くことがどれほど困難かを突きつけられたのである。また、書いた言葉によって強権的な体制に揺さぶりをかけようとしてきた彼なのに、サスー・ンゲソは激しい内戦によって政治権力を奪還し、それはさらに強化されてしまった。そのうえドンガラ自身は亡命という「容易な解決」(Brezault 2010:128)を選び、自国の人々から遠ざかってしまったのである。そのようなドンガラにとって『狂犬ジョニー』の執筆は、作家として再び現実に立ち向かう作業であったはずである。今も「アフリカの作家」として、「アフリカを出発点として書いている」(ibid.:123)とする彼は、「隠されている事柄を明るみにだしながら、なんらかの意識をもつための手助け」(ibid.:127)をするのが作家だと述べている。彼は『狂犬ジョニー』で子どもたちをどのように描き、そうしながら何を模索し、読者に語りかけているのだろうか。

2. 『狂犬ジョニー』の物語

『狂犬ジョニー』は 31 章、457 ページからなる小説である。舞台は中部アフリカのある国とされるが、起きていることはコンゴ共和国の内戦前後の出来事に重なる。小説の国では、直近の選挙に敗北した陣営が選挙の無効を訴えて現大統領の陣営と対立、武力衝突に発展しているのである。

物語の語り手は上述したように、15 歳の少年ジョニーと、中等教育後期課程の最終学年で学ぶ左利きの 16 歳の少女ラオである。二人はほぼ 1 章ごとに入れ替わり、見たことや体験を語るのである。首都で溝掃除や買い物客の荷運びをしていたというジョニーは家族について何も語らず、いまや「死を与える」を意味する「マタマタ」の名をもつ民兵組織に属し、子ども兵士となっている。小説のタイトルにある「狂犬」は、彼の戦時名である。ジョニーが子ども兵士になったのは、彼が暮らす地区に、しばらく前の選挙に敗北した陣営「国民民主解放運動(MPLDP)」の民兵が現れたときである。民兵たちは、選挙に勝った大統領の党「国民完全解放運動(MPLTP)」の支持基盤であり、大統領の帰属民族であるマイドゴ人(Mayi-Dogo)が国の富を独占していると主張する。そしてジョニーたちドゴマイ人(Dogo-Mayi)は民兵組織に協力して現政権を倒すべきだと迫ったのである。地区の大人たちが民兵の暴力をまえに黙り込んでしまうなか、ジョニーは、民兵たちに付き添う、「なんかの博士号をもってて、どっかの大学の教授」(Dongala2007b:133)だという知識人が、マイドゴ人によるドゴマイ人の殺戮現場だという写真を振りかざすと、怒りに駆られ、自ら民兵となるのである。

物語におけるこうした関係性を簡潔に図示すると、以下のようになる。

国民民主解放運動(MPLDP)	← 〈対立〉 →	国民完全解放運動(MPLTP)
反政府勢力の政党		現大統領の政党
ドゴマイ人(Dogo-Mayi)を徴募		大統領はマイドゴ人(Mayi-Dogo)
民兵組織：マタマタ(Mata Mata)		民兵組織：チェチェン(Tchétchène)

民兵組織が内戦の大義として正義や民主主義を掲げようとも、上図のように対立する政党の名称は近似している。ここからは、どちらの陣営も政権獲得という同じ目的のために国民を平然と犠牲にしているという、作者の皮肉が読み取れるのである。また自称知識人のもっていた写真の信憑性を検証するすべはなく、自派を正当化して民兵を集め

ようとする彼の言説は、民族対立を煽るものとなっている。そんな言説にのったジョニーは、兵士となり、略奪のために戦う民兵の実態を語るのである。

このような物語は、首都を制圧したジョニーたち民兵がマイドゴ人の民兵組織チェチェンを追い払い、政権交代を果たした直後の、夜明けのラジオ放送から始まる。ジョニーの上官で、いまや新政権の将軍となったザップ（Giap）は放送で、「解放された人民の勝利を祝うため、われらが新大統領の承認のもと、48 時間の略奪を許可する。ほしいまま、手に入れたいものは何でも奪え、これは勝利の一部だ」(ibid.:19)と都市の略奪を宣言するのである。これを聴いたラオは、母と 11 歳の弟フォフォ(Fofo)をつれて逃げることにし、同様に避難する群衆に加わるのである。

小説ではやがて子どもたちが次々に姿を消す。まずラオの弟は避難の混乱で行方不明になる。豊かな家庭に育ち、高級車で戦場を脱出するかと思われたラオの親友のメラニー(Mélanie)も命を落とす。ラオはまた、10 歳前後の果物売りの少年がスパイの疑いをかけられ、ジョニーに射殺されるのも目撃する。

ラオたち避難民は一時的に国連高等難民弁務官事務所(UNHCR)の施設に匿われるが、政権を奪取した MPLDP は難民の中に敵の民兵がいるとして、施設の開放を UNHCR に要求する。そこに避難していたわずかな欧米人は、駆けつけた出身国の近代的な装備の兵士に守られ、バスで出ていく。しかし両親をすでに殺害され、UNHCR にたどり着いていたメラニーはバスに取りすがり、無残に轢き殺されるのである。そしてラオは新政権が敵の掃討のために砲弾を降らせ、民兵が跋扈する都市に放り出される。母を知人の家に連れていったのもつかのま、その夜の爆撃で母は亡くなる。母の遺体を置いて立ち去るのをためらうラオであったが、娘を亡くしたという白髪の老人の、「おまえが逃げて、生きたら、それがあの殺し屋どもを見返すことになるんだ。やつらはわしら全員を殺すことなどできないということになるんだ」(ibid. :351)という言葉に説得され、森に逃げる人々についていくことにする。けれどもラオは森でも軍の追跡を受け、命からがら難民キャンプにたどりつくのである。ラオはこのキャンプで、戦争によって傷ついた女性や子どもに出会う。また UNHCR のスタッフだったスウェーデン人女性ビルジット(Birgit)に再会し、国外での学業継続を提案される。

だがラオはここでジョニーと対峙することになる。彼女はジョニーに打ちのめされそうになった飢えた幼女を助けて彼の恨みをかい、彼の家に連行されるのである。しかし彼女はジョニーを床に倒し、股間を踵で力いっぱい踏みつけると、動かなくなった彼を

おいて立ち去る。一度は国を出ようと考えたラオだが、幼女を新たな家族にするときめ、祖父の民族の言語で〈喜び〉を意味する「キエセ(Kiessé)」の名をつけるのである。

3. 戦場の子どもの対立する像

では以下では物語の二人の語り手の像を読んでいきたい。小説の出版時、子ども兵士を描いたアフリカ文学作品のなかでは、二人の語り手を設定した作品は他に見当たらなかった(Brezault 2012:46)。兵士が見ることのない避難民、とくに女性の体験についての少女の語りと、子ども兵士の語りは、戦場を立体的に描写していく。そうしながら二人の語りは互いを照らし、双方の姿を浮き上がらせるのである。

3. 1. 子ども兵士ジョニーの語り

まずジョニーの語りから彼の像を読み取りたい。ジョニーを含めた子ども兵士の行動の特徴は、現実の世界と自身の人格をつくりかえ、戦闘ゲームや映画の人物のようにふるまっていることである。彼らは首都の居住区を「カンダハル」、「クウェート」、「サラエボ」(Dongala 2007b:72)といった異国の激戦地の名で呼び、ジョニーらに敵対する民兵組織も「チェチェン」を名乗っているのである。兵士たちはまた、言葉がもつ呪術的な力を自分のものにしようと戦時名を名乗る。ジョニーも、「名ってものは、ただの名じゃない。名には隠された力がこもってるんだ」(ibid.:23)と、「リュフア・リワ：死を殺せ」(ibid.:23)、「マティティ・マベ：毒草」(ibid.:25)、そして「狂犬」(ibid.:148)と名を変えていくのである[6]。

ドンガラは子ども兵士のこうした行動を自国の内戦で実際に観察している(Dongala 2011b)。内戦前から映画館など存在しなかったこの国の首都では、とくにアメリカ製の戦闘映画や空手映画を不法コピーして個人的に上映する仕事が創出されていたという。子どもたちはこうした映画やゲームで戦闘場面に頻繁に触れ、同時にテレビの衛星放送でコソボ、ルワンダ、イラクなどでの紛争の報道にもふれていた。ドンガラは、こうして子どもたちは容易に暴力を内面化できる状況におかれ、またテレビに流れる異国の戦闘を解説してもらうこともないまま、映画で見る暴力もテレビで見る暴力と同じ現実と

---

[6] ドンガラによると、コンゴ社会では言葉を一つ発するだけで人も殺せるとしばしば信じられているという。ジョニーが戦場名を繰り返し変更するのも、言葉がもつそうした力を自分のものにしたいからだという(Brezault 2010:131)。

捉えていったとみている。そしてコンゴ共和国の紛争では、暴力を実際このように捉えた子どもたちが導き手もないまま兵士となり、想像の世界を現実世界に移していったというのである。そのことは各派の民兵組織が、この時期にアフリカで人気を博した戦闘映画やテレビドラマにちなんで、「コブラ」、「ニンジャ」、「ズールー」と名乗ったことによく表れているという。ただし、独立以来のアフリカ各地で「投票ではなく武力」(ibid.)で政権の座に就いた政治指導者が登場し、法制度や国家財政を意のままにし、「強い男」(ibid.)と呼ばれて敬われ、恐れられてきたので、そのことも子どもたちの行動に影響を与えているとドンガラはいう。コンゴ共和国では子ども兵士の大多数が都市で徴募された。都市では、子どもはしばしばこうした「強い男」と呼ばれる政治家たちが容赦のない暴力を行使し、物質的な豊かさを誇示するのを見て育つ。国家が崩壊し、武器を手にできる機会が訪れたとき、子どもたちはこのような政治家たちをモデルとしていったというのである。そうであるならドンガラはこの小説に、もはや想像の世界からしか現実を見ない子ども、国民を顧みず、権力を使って蓄財する政治家たちを模範とするこのうえなく危険な子どもたちを描いていることになるのである。

こうして描かれたジョニーの人格は、友人の死をまえにしたときの彼とラオの語りとを比べることでより鮮明になる。ラオは子ども兵士たちがメラニーの家族の車を乗り回すのを見て、親友が殺害されたと思い込み、次のように話す。

「泣いたのは友だちのためなのか、あの知らない子のためだったのかわからない。両方のためだったと思う。子どもたちを平気で殺すなんて、この国はいったいどうなってるんだろう。だれかの親友を殺すなんて、やつらはほんとにひどい。心がないんだ。」(Dongala 2007b:89)

一方、ジョニーは親友カイマン(Caïman)が戦闘報酬の即時支払いを要求して、リーダーのザップに射殺されたとき、以下のような言葉を発するのである。

「カイマンはおれの友だちだ。泣きそうになった。ひとの友だちを殺すか。ひどいぜ、まったく。心ってもんがないんだ。」(ibid.:73)

似通った言葉づかいだが、ラオは親友だけでなく、直前に目撃した果物売りの少年の

ためにも涙を流し、この国の現状にやりきれなさを感じている。これに対してジョニーは、自身で殺害し、強姦してきた人々の死や恐怖に思いを及ばすことはなく、ただカイマンの死を嘆いているのである。徴募されたときに見た、殺された人々の無残な遺体の写真に「目を閉じた、もう見たくなかった」(ibid.:130)という彼の感受性はもはやどこにもない。子ども兵士の研究で知られるアメリカの外交政策研究者シンガーは、戦争の体験は子どもの精神に大きなダメージを与えるので、「他人の痛みに鈍感になり、思いやりをまったくなくしてしまう場合も多い」(シンガー2006:165)とする。ジョニーもまさにこうした子ども兵士となっているのである。このことは他の子ども兵士も同様である。彼らは自己中心的で、戦利品をめぐる争いでは簡単に仲間を殺害するのである。

ジョニーはまた、小学校に２年通い、「仲間内で唯一の知識人」(Dongala 2007b:24)という自負を繰り返し語る。自称知識人の説得に素直に従ったのも、知識人への憧れがあったからだと考えられる。彼は兵士になると、けっして開くことがない本を略奪し、知識人の体裁を整えようとするのである。そのため彼の知識人意識を傷つける者は、容赦ない報復を受ける。たとえばジョニーたちが首都の掃討の途中、税関の監査官としてなぜか莫大な富を築いたイバラ(Ibara)の家を襲撃したときには、豪華な暮らしに圧倒されたジョニーは、イバラよりも教育のあるところを見せようとする。しかしイバラ夫妻に「十の三乗はいくつか」(ibid.:338)と問い、かえって就学経験の短さを暴露したうえ、イバラの妻が中等教育機関の教師であることを知るのである。すると彼のなかには「国の金を盗んで」、「おれたちを見下し、周りのやつらの惨めさなんておかまいなく」(ibid.:342)贅沢な暮らしをしてきた夫婦への怒りが抑えようもなく沸き起こり、彼はイバラの目前で妻を強姦するのである。富や権力を手にした客に使われ、見下されてきた彼は、知識人という自己意識を支えにしてきたのである。しかし誰にも心を開かず、自分で作り上げた世界で生きる彼は、現実を理解し、人生を切り開く知識を他者から得ることはないのである。

このようなジョニーだが、上官の命令には盲目的に従うとともに、その行動やものの見方も模倣している。たとえば彼は、村を襲うときには「まずいちばん弱い者たち、とくに女や子どもを脅す」(ibid. :194)と男たちは言いなりになる、といった教えこまれた戦闘手法を教科書のように反芻するのである。そんな彼はザップからの連絡が突然途絶えると動揺する。政権交代が完了し、民兵組織はもう子ども兵を必要としなくなっていたのだが、彼はもはや自分の考えで判断し、行動することができないのである。彼はま

た、上官からのこうした支配の関係を、武器を持たない女性や子ども、民間人男性に対して逆向きに押し付けていく。15 歳の子どもに過ぎない彼がそうした行動をとれるのは、武器を与えられ、「権力は銃の先にある」(ibid.:44)と教えこまれたからである。女性を従属させる対象としてみるのも、彼が上官の女性観を共有しているからであろう。たとえば彼は、子ども兵士に引き入れた恋人に、ラジオで聴いた歌からとった名「ロヴェリータ(Levelita)」を与えている。彼は名づけによって恋人に好みのイメージを与え、彼のためだけに存在する女性としているのである。このため上述のイバラの妻の強姦は、彼にすると知識を得て男性と張り合おうとした「危険な」(ibid.:340)女性への罰という意味ももつことになる。イバラの妻を辱めたジョニーは、「まえよりも賢くなったように感じ」(ibid.:343)、彼女の知性までも自分のものにしたと考えるのである。彼にとって性暴力は女性たちを支配する手段なのである。

ジョニーは内戦終了後には居場所を失うが、すぐに新政権（元反乱軍）の軍の末端に組み込まれ、難民キャンプの警備の任務を与えられる。しかしジョニーたちはそこでもこれまで通りの行動をとり、さらに罪を重ねるのである。

3. 2.　難民ラオの語り

では次にラオの語りとうえにみたジョニーの像から、ラオの像を浮かび上がらせたい。物語冒頭で、ザップがラジオ放送で民兵たちに略奪許可を出したとき、ラオはすぐさま母と弟を連れて逃げる準備に取りかかる。石工だった父は、しばらく前に家を略奪した前政権軍の兵士に殺害されている。母はその際の傷がもとで歩行不能になっている。そのためラオがまずとった行動は、母を乗せる一輪車の状態を確かめにいくことである。車輪を回し、パーム油を差して軋みをなくす動作のひとつひとつを語るラオは、以降もよく考えた行動で家族を守ろうとする。ラオが周到な行動をとれるのは、彼女があらゆることをよく観察し、それについて考える習慣をもつためだと考えられる。たとえばラオは逃げる群衆のなかで、とりわけ子連れの女性を観察し、「女性たちは生き延びるすべをいちばんよく知っている」(ibid.:48)と気づく。母親たちは幼い子どもの身体を紐で自身に結び付け、迷子にならないようにしていたのである。あるいは彼女は、UNHCR の避難者収容所のスタッフのビルジットの髪が明るい栗色なのを見て、「ある国に金髪の女性しかいないなんてありえない、右利きの人しかいない国がないのと同じだ」(ibid.:180)と考え、「スウェーデン人女性は一般に金髪だ」という自分の先入観に気づく。

ラオはこのように、観察した事実をまとめて一般的な原理を導き出したり（帰納）、逆に一般的な見方から出発して観察によって新たな結論を出したり（演繹）する力を持ち合わせているのである。

彼女はこうした能力を勤勉な父から獲得している。三角定規や折り尺を使って働く父を尊敬し、そばで仕事を見てきたラオは、幾何学の授業で直角を学んだとき、三角定規を思い出し、すぐ理解できたと語るからである(ibid.:32)。彼女はこうして、言葉で説明され、想像の中で組み立てなければならない定理や原理と、具体的な形や実在する現象の間を往来する能力を身につけ、自由な思考ができるようになったと考えられるのである。知識を得る楽しさを知るラオは成績も優秀である。父に憧れ、建設のエンジニアになる夢をもつラオは、戦争を生き抜き、学業を続ける動機も十分である。避難するとき、弟と自分の学位証書や教科書を大切に地中に隠したのもこのためである。

ラオはまた避難中、愛情と思いやりに満ちた母との関係や、他の避難者との出会いを通し、人は他者に共感し、他者とともに生きていると知っていく。まず母は避難開始時、子どもの足手まといになるまいと同行を拒否するが、子どもたちが母と残ると主張すると、それは親子ともども民兵らに殺害されることを意味するため、抑えていた涙を流し、「行きましょう」(ibid.:52)と答えるのである。ラオはこうして、「母さんたちってこうなんだ、自分自身の死を見つめるのは怖くないけれど、子どもが死ぬのを見るのが怖いのだ」(ibid.:52)と、母の子どもへの無私の愛を再確認し、母をなんとしても守ろうとするのである。その後彼女は、危機的な状況下に無私の心を他者にも向けられる人がいると知る。ラオたち避難者の集団が民兵に襲撃されたとき、見知らぬ男性が母の乗る一輪車を全速力で押してくれ、UNHCR の施設に逃げ込むことができたからである。ラオはこの行為に深く心を動かされ、言葉で「ありがとう」と伝えることが自分にできる唯一のお返しだと考える。しかし相手の顔を思いだせずに深く悩むのである。ところが同じ施設内で水の蛇口を奪い合う人々の中に飛び込み、一人の老婆に水を差し出したときには、無言で涙を流すだけの老婆の姿はラオに強い印象を残す。やがて難民キャンプにたどりついたときには、民兵によって 12 歳の娘とともに強姦された女性の告白に耳を傾け、「私がフォフォを思うたびに感じる、心を引き裂かれるような痛みは、私だけのものだ。私はこの人の痛みを、この人と同じように感じることなんてできないんだ。私の言葉はこの人の肉体の苦痛を和らげることはできない。そういうときには黙っているほうがいい」(ibid.:425)と口を閉ざし、ただ女性に寄り添うのである。ラオは、一見無

関係な体験や感情を通して身の回りの世界をみつめ、人はこのようにふれあって生き、言葉にできない感情や、言葉にしないほうがいい感情をも交わしながら慰められたり、関係を作ったりするのだと知っていくのである。そうしながらラオは、自らの見方や考え方を補い、修正していくのである。

物語では、ラオの生理についても語られる。下着が汚れたらどうするのか、生理痛がひどくなったらどうしようと、彼女は避難とは別の憂鬱さにも苛まれる。小説は生理という現象を通して、女性たちが男性にはない不利な条件とともに避難しなければならないことを語る。難民女性の生理期間中の苦痛については、1994 年の虐殺の後に旧ザイールに避難したルワンダ人女性マリー・ベアトリス・ウムテシ(Marie Béatrice Umutesi:1959-)が手記で語っている。難民キャンプ運営は男性が行うので、生理の血で汚れた下着や急ごしらえのナプキンを洗う特別な場所などなく、洗濯の水はキャンプ内のあちこちに赤い水たまりを作ったという。惨めさに彼女は「これほどの苦難を生きねばならないとは、私たち女性はいったいどんな罪を犯したというのか」(Umutesi 2004:77)と自問したという。避難の途上では、女性は性暴力や性関係の強要に脅かされるが、それだけでなく、生理中であるという、平時なら人に知られないようにする個人的な事情さえあからさまにしなければならないのである。しかし女性がけっして主導権をとれない社会、物語中のロヴェリータがそうであるように、女性が男性の支配物とみなされる社会では、女性は屈辱に耐えるだけである。生理をめぐるラオの苦痛は、こうしたこととつながっているのである。一方、ラオが難民キャンプで寄り添った、上述の、娘とともに民兵に強姦された母親は、そのような女性の境遇を飛び出し、別の行動の仕方があることをラオに示唆する。それは難民キャンプを取材したベルギーの放送局のカメラに向かって、彼女が体験を語ったときのことである。ジャーナリストが、一般的にはこうした被害を受けた女性は恥じて、匿名で語ることが多いがと問うと、女性は話をこう結ぶのである。「黙っていたら、私たちは見えない存在になる。もう私は隠れたりしない。顔を出して、名前を叫びます。私はレア・マランダ」(Dongala 2007b:435)。すると驚いたことに、レアの話を聞いていた周囲の難民女性たちは、子どものミルクや薬、身分証のために身体を差し出した自身の体験を次々に語り出したのである。ラオは、「威厳をもって」(ibid.:435)体験を語ったレアのおかげで、最初は語ることをためらっていた彼女たちは、「言葉を発すること」(ibid.:436)こそが苦悩からの解放の始まりであり、「本当の恥とは、被ったことについて口を閉ざし続けることだ」(ibid.:436)と気がつ

いたのだと解釈するのである。

ラオはこうして家族とのつながりや就学生活によって獲得した知を駆使しながら避難の道を切り開くとともに、他者との出会いの中で、彼女の生きる社会や世界について知り、考え、どんな状況でも尊厳をもって生きることができると知っていくのである。

3. 3.　ジョニーとラオの対峙

ジョニーとラオの像を以上のように読んできた。略奪と暴力しか知らず、偽の知識人というアイデンティティにしがみつき、しかし他者のアイデンティティや価値観を知ろうとしないジョニーに対し、ラオは他者とともにいる自分について考え、内戦中も周囲の人々から多くを受け取っている。以下では二人のそのような像や、ラオが学んだことを通して、二人が対峙する最終場面を解釈していきたい。

二人の語り手は UNHCR の施設や、ラオが爆撃を受けた地区で互いを見かけ、ラオはジョニーの戦時名が「狂犬」であることも知るが、直接向き合うのは最終場面においてである。難民キャンプにたどりついたラオは、いまや正規軍の兵となったジョニーたち元民兵がキャンプ内を武力で支配し、支援物資を横領するのを見る。そんななか飢えた幼女をジョニーがベルトでしたたか打ちのめそうとしているのに立ち会ったラオは、幼女に覆いかぶさって守る。その行動は難民たちの兵士への抵抗を引き起こし、ジョニーは難民にひどく殴られる。この小さな反乱はすぐに銃で鎮圧されるが、プライドを傷つけられたジョニーはラオを拉致し、住処へと連行するのである。

もはや一巻の終わりと考えたラオだが、それでも「主導権をとろうと決意」(ibid.:444)し、自分からジョニーの家に入り、ジョニーを待つ。この行動にジョニーは、「おかしな女、おかしな娘だ。誰かのまえで、とくに女のまえでこんなことを思ったのは初めてだ」(ibid.:444)と衝撃を受ける。ラオは初めて出会う行動や価値観を自分なりに受け止め、考えや行動に生かしていくのに対し、ジョニーは彼の女性観に反するラオの行動を受け止めることができず、動揺するばかりである。ラオは、性暴力の被害にあった多くの女性がとってきた、あきらめ、被害を隠すという行動から抜け出そうと、体験を口にしたレアによって、最後まであきらめない態度を教えられたようにみえるのである。

ラオは続いてジョニーとの会話でも主導権を握り、彼を翻弄する。問いに逐一同じ言葉で返したかと思うと、反対に沈黙し、名乗るのを拒みながら、彼の戦時名を口にするのである。名がもつ隠された力を畏れるジョニーにとって、これは相手に弱みを握られ

たことを意味し、彼はいよいよ恐怖を感じるのである。そのうえラオに「あんたは人殺しそのもの」(ibid. :448)といわれた彼は傷つき、「殺して、火をつけて、女を犯す。ふつうのことだ。戦争ってのはこうなんだ」(ibid. :448)と反論するのである。そして略奪した高級衣料や本のコレクションを開陳し、たんに兵士ではなく、着こなしのセンスがあり、知識人であると示そうとするのである。だがラオはそれを「愚かしさ」と「無邪気さ」(ibid.:455)としか捉えず、見下した態度をとるので、ジョニーはますます劣勢に立たされていく。

こうしたなかでジョニーがコレクションの最初の一冊としてラオに投げてよこした重く分厚い聖書を、ラオは左手の下に収める。ジョニーはこれを、利き手を自由にする仕草と見る。しかしじつはそれは、右手が利き手だと彼に信じさせるためのラオの最後の戦略であった。彼女はジョニーが近寄ってきた機をとらえ、彼の顔面を聖書で殴りつけるのである。衝撃で後ろに倒れたジョニーのうなじは、そこにあったテーブルの角に激しくぶつかり、彼は立ちあがることができなくなる。こうしてラオは「右利きの彼の先入観を利用して」(ibid.:455)ジョニーを倒すのである。さきにみたように、スウェーデンの女性はみな金髪だという自身の先入観を修正したラオはここで、先入観をもってしまう人間の性質を逆に利用しているのである。

倒れたジョニーが衝動的に拳銃へと手を伸ばすと、ラオは彼の指をウィスキーの重たい瓶で砕き、さらには「多くの女性たちを辱めた局所を踵で力いっぱい」(ibid.:456)踏み、叩き潰すのである。これが、ジョニーに武器を一度も使わせずに身を守ったラオの戦略であった。

4. むすびに

以上のように、ラオとジョニーの像をそれぞれの語りから読み取り、考察してきた。多くの子どもたちが命を落とした戦場を生き抜いたラオは、愛情あふれ、勤勉な両親のもとで育ち、観察したことを一度再検討してみて判断する力を身につけている。学ぶことが将来の夢の実現につながることを知っており、両親も貧しいながらも学業を続けさせてくれたのである。そのような彼女は、他者の言葉や行為、価値観をじっくり考え、他者を受け入れ、寄り添うのである。ジョニーを打ち負かすのは、このような少女ラオである。ジョニーがこのような子どもなら、彼を兵士に誘った知識人の言葉や証拠写真を子細に検討し、徴募に応じることはなかっただろう。頼れる親や大人はおらず、学校

に対しては算数の定理を「先生の罰を受けて覚えた」(ibid.:337)という思い出しかないジョニー、そして、彼を虐げ、富を見せびらかす金持ちたちに激しい憎しみを燃やすジョニーの像を読み取ってみると、ドンガラの小説は、「どのようにして大人の犠牲にならない子どもを育てられるのか」というドンガラの模索を浮かび上がらせ、読み手にも問いかけてくるように思われるのである。

最終場面でジョニーが懲罰を受けたように読めても、小説は子ども兵士を断罪しているのではないと考えらえる。チュニジア人のジャーナリスト、F・ベレギニ(Férial Bérraies-Guigny)は、世界各地の紛争地の子どもの状況を取り上げた著書で、「戦争状況で徴募に応じる選択をした子どもは、自由に考えてそうしたのではないことをけっして忘れてはならない。応召はある政治的、社会的、経済的文脈の枠内でなされるのである」(Barraies-Guigny 2015:110)としている。子ども兵士は罪を犯す状況に追いやられた犠牲者でもあるのである。最終場面ではたしかに、「権力は銃の先にあるって教えられたけど、本当だ」(ibid.:44)と言いながら人々を射殺したジョニーの指や、女性たちを強姦した身体部分がラオによって砕かれ、それが子ども兵士の行為の全面否定として読める。しかしこのとき、ラオも暴力の主体となっているのである。戦争は、平時なら犯罪となる行動を無垢な少女にさえとらせ、その重荷を負わせるのである。子どもだけが対峙している最後の場面は虚しく、むしろこのような子どもたちを生み出したのに責任を取らない政治家や軍人を断罪しているように読めるのである。

また物語中の国では、内戦によって政権が交代しても、「政治的、社会的、経済的文脈」が変更する兆しはなく、ジョニーたちは社会的には抹殺された状態に置かれている。これを読むとき、ジョニーのような子どもを「どうしたらいいのか」と読者は自問せざるをえない。亡命し、「私には国を出るチャンスがあったが、あちらにいる何万人もの子どもたちについてはどういったらいいのか。あの子たちは国外に出られないのだ」(Brezault 2010 :129)と語るドンガラは、作家としての仕事を通して、内戦後の社会で育てたい子どもの像や大人の役割を自問し、問いかけているのだと考えられる。

小説の結末は明るいものとはいえないが、ラオが生き延びることには小さな希望が感じられる。声をあげることで、苦悩からの解放の一歩を踏み出した女性たちに出会った彼女は、女性や子どもに寄り添う社会を具体的にイメージしてつくりだす人になると想像させてくれるからである。また最後にラオが幼女に新たな「存在」(ibid.:457)を与えようと、「キエセ（喜び)」と名づける行為は、破壊的な兵士としての存在を自分に与え

たり、恋人を支配したりするためにジョニーが行った名づけの意味を反転させている。名づけは積極的な意味を帯び、世界は生きるに値すると、幼女にも、幼女の名を耳にした人々にも語りかけるようである。そんなラオは、「殺して、火をつけて、女を犯す。ふつうのことだ。戦争ってのはこうなんだ」(Dongala 2007b :448)というジョニーの言葉を完全に否定し、積極的で建設的な言葉で反論する大人になっていくと思えるからである。ラオは理想的すぎる子どもだろうか。しかし絶望しかないように見えるこの国では、理想を語ることこそが未来をひらく方法なのではないだろうか。

参考文献

シンガー，P・W，2006.『子ども兵の戦争』小林由香利（訳），日本放送出版協会.

武内進一，1994.「コンゴ　作られた部族抗争」『アフリカレポート』18，10-13.

――― 2000.「現代アフリカの紛争 ― その今日的特質についての考察」武内進一（編）『現代アフリカの紛争―歴史と主体―』，3-52，アジア経済研究所.

――― 2016.「アフリカの「三選問題」― ブルンジ、ルワンダ、コンゴ共和国の事例から」『アフリカレポート』54，73-84.

村田はるせ，2016.「ブルキナファソの作家アンソムウィン・イニャス・イエンの絵本『平和のハト』のメッセージ」『アフリカ文学研究会会報 MWENGE』43，1-6. http://web.kyoto-inet.or.jp/people/keiko-ku/Africa/Mwenge%2043.pdf（2016 年 5 月 19 日確認）

Berraies-Guigny. Férial. 2015. *Enfance et violence de guerre*. Paris, L'Harmattan.

Brezault, Eloïse. 2010. " Emmanuel Dongala." *Afrique, paroles d'écrivains*. 113-134, Québec, Mémoire d'Encrier.

――― 2012. *Johnny chien méchant d'Emmanuel Dongala*. Gollion, Infolio.

Cazenave, Odile & Patricia Célérier. 2011. *Contemporary Francophone African Writers and the Burden of Commitment*. University of Virginia Presse.

Couao-Zotti, Florent. 1996. *Charly en guerre*. Editions DAPPER.

Dongala, Emmanuel. 1979. "Littérature et société : ce que je crois." *Peuples Noirs Peuples Africains*, 9, 56-64.

――― 2001. *Le feu des origines*. Paris, Le Serpent à plumes.

――― 2007a. *Jazz et vin de palme*. Paris, Groupe Privat/Le Rocher.

――― 2007b. *Johnny Chien Méchant*. Paris, Le Serpent à plumes.

――― 2010. *Un fusil dans la main, un poème dans la poche*. Paris, Editions du Rocher.

――― 2011a. *Les petits garçons naissent aussi des étoiles*. Paris, Groupe DDB.

――― 2011b. "Hollywood, Pirated Videos, and Child Soldiers." *Warscapes*, November 2. 2011. http://www.warscapes.com/opinion/hollywood-pirated-videos-and-child-soldiers （2016 年 5 月 30 日確認）

Hien, Ansomwin Ignace & BAB's Décor (illustrations). 2006. *Les colombes de la paix*. Ouagadougou, Découvertes du Burkina.

Kadi, Germain-Arsène. 2013. *De Johnny Chien Méchant d'Emmanuel Dongala à Johnny Mad Dog de Jean-Stéphane Sauvaire*, *littérature, cinéma et politique*. Paris, L'Harmattan.

Kourouma, Ahmadou. 2000. *Allah n'est pas obligé*. Paris, Seuil.（2003『アラーの神にもいわれはない　ある西アフリカ少年兵の物語』真島一郎訳、人文書院）

Le Gros, Julien. 2016. " Emmanuel Dongala ： "Mon prochain roman sera une récréation ! ". " *Le Point Afrique*, le 2 juillet. http://afrique.lepoint.fr/culture/emmanuel-dongala-mon-prochain-roman-sera-une-recreation-02-07-2016-2051382_2256.php （2016 年 7 月 8 日確認）

Mbenga Mpiala, Sammy. 1999. *L'enfant en guerre*. Abidjan, CEDA / Montréal, HMH.

Monénembo, Tierno. 2000. *L'aîné des orphelins*. Paris, Seuil.

N'Dah, François d'Assise. 2008. *Le retour de l'enfant soldat*. Abidjan, Valesse Editions.

Tadjo, Véronique & Bertrand Dubois (illustrations). 2007. *Ayanada, la petite fille qui ne voulais pas grandir*. Arles, Actes Sud.

――― & Kyoko Dufaux (illustrations). 2009. *Ayanda, la peite fille qui ne voulais pas grandir*. Abidjan, NEI/CEDA.

——— & Catherine Groenewald (illustrations). 2010. *The little girl who didn't want to grow up*. Auckland Park, Jacana.

Umutesi, Marie Béatrice. 2004. *Surviving the slaughter : the ordeal of a Rwandan refugee in Zaire*. foreword by Catharine Newbury;translated by Julia Emerson, Madison, The University of Wisconsin Press.

Verschave, François-Xavier. 2000. *Noir silence, qui arrêtera la Françafrique ?*. Paris, Les Arènes.

Yengo, Ptarice. 2006. *La guerre civile du Congo-Brazzaville ; 1993-2002 "Chacun aura sa part"*. Paris, Karthala.